

## 環境教育学会関西支部／関西環境教育学会第2回合同研究大会の開催に寄せて

近畿大学 新田和宏

昨年度に続き2回目となる合同研究大会は、「SDGsを問い直すー環境教育の原点からー」をテーマに据えシンポジウムを開催します。昨年度のテーマが「環境教育を原点から問い直す」でした。「原点」や「問い直す」という用語が重複します。連続性が察しられるかと思えます。

承知の通り、国連が2015年に作成したSDGs（持続可能な開発目標）は17の目標と169のターゲットから成り立ちます（『我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ』）。2000年に国連が作成したMDGs（ミレニアム開発目標）の後継に値するのがSDGsです。MDGsは、途上国における民衆の貧困の削減に最大の感心を払い、その目標1に極度の貧困と飢餓の撲滅を置き、2015年までに1日1.25ドル未満で生活する人口の割合を1990年の水準の半数に減少させるとしました。

SDGsも、最大の関心は貧困の削減です。但し、MDGsとSDGsの大きな違いは、MDGsが途上国を対象にしたのですが、SDGsは途上国はもちろんのこと先進国や新興国を含め全ての国や地域が対象に含まれました。貧困は途上国の問題というだけではありません。貧困は先進国の問題でもあり、就中、日本国内でも、「ワーキングプア」や「女性の貧困」、「生活困窮者」および「子ども貧困」などのように、豊かな社会における構造的な格差から貧困問題が出現しています。それ故に、『我々の世界を変革する』は、その冒頭に、「極端な貧困を含む、あらゆる形態と側面の貧困を撲滅することが地球規模の課題であり、持続可能な開発のための不可欠な必要条件であると認識する」と示しました。また、17の目標の最初に、「あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わられる」と示しました。

SDGsは「誰一人取り残さない」というスローガンを打ち出しました。それは換言すると、排除に対する社会的包摂、および分断に対する社会的連帯を理念としている言えるでしょう。我々には何処か既視感があります。そうです。3.11の時に巻き起こった「絆」です。その「絆」が、一過性の「災害のユートピア」で終息することなく、日常の生活の中で定着することが求められます。排除や分断がなく、社会的包摂と社会的連帯を具現化した社会の在り方こそ、持続可能な社会のベースに据えられるべきものと考えられます。

さて、環境教育とSDGsはどう関係するのか。この疑問こそ、今回の研究大会のテーマとオーバー・ラップするところですが、大会に参加する皆様におかれては、大いに議論して戴きたいと思えます。SDGsの目標4に「全ての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」とあります。そして目標4の4.7というターゲットに、「2030年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の促進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通じて、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するための知識及び技能を習得できるようにする」とあります。

環境教育はSDGsはどう関係するのかという問題関心の下に、ターゲット4.7に多少とも訓詁学的なコメントを敢えて加えれば、「持続可能な開発のための教育（ESD）」や「持続可能なライフスタイル」に環境教育は関係性が深いと考えられますが、と同時に、「持続可能な開発を促進するための知識及び技能を習得できるようにする」という件となると、自然体験学習を中心とする日本型環境教育は果たして熱心であったかどうか問われますし、とりわけ、持続可能

な開発を促進するための技能の習得となると、環境教育全体に新たな課題が突き付けられたようにも考えられます。シンポジストとともに、フロアの皆様とともに大いに議論したいところです。

改めて、「SDGsを問い直すー環境教育の原点からー」、これが今回の研究大会のテーマです。環境教育とSDGsとの関係性はさることながら、我々が議論すべき対象はSDGsそのもの全体であり、なおかつそのSDGsを環境教育の原点から問い直すという、実に壮大なものであります。研究大会に参加する皆様には、恐れながら、ぜひ「予習」をお願い申し上げます。『我々の世界を変革する』をお読みになり、17の目標と169のターゲットを一瞥しておいてください。

誤解を恐れずに附言すれば、環境教育とSDGsとの関係性の問題は、「環境教育者コミュニティ（村）」における内輪の話です。その関係性がクリアになったらと言って、SDGsの目標が実現さけるわけではありません。繰り返しますが、今回の研究大会のテーマは余りにも壮大であり、環境教育の原点に立ち返り、なおかつ半世紀以上にもおよぶ日本の環境教育の歴史を踏まえながら、17の目標と169のターゲットから成るSDGsを問い直すものです。貧困や飢餓はもちろんのこと、持続可能な農業、ジェンダー平等、持続可能な水の管理、持続可能な近代的エネルギーへのアクセス、ディーセントワーク、イノベーションの推進、持続可能な人間居住、不平等の是正、気候変動等々を、環境教育の原点と歴史から問い直してください。

思うに、SDGsを前にして、環境教育はその存在意義（レーゾン・デートル）が問われています。ESDに続きSDGsという「外来性」のインパクトを、日本の環境教育はどのように内生化しかつ吸収／再構築しえるのか、このような課題を環境教育の原点にまで立ち返えながら、問われているかと思えます。シンポジウムにおける実りある議論を期待します。

尚、第2回研究大会は、実行委員長を仰せつけられました当方が奉職している近畿大学の和歌山キャンパス（生物理工学部）で実施致します。12月1日は、天候が良ければ、キャンパスを取り囲む里山が全山紅葉に彩られ、その煌めく晩秋の風景を楽しむことができるかと思えます。申し遅れましたが、当方は近畿大学で、「持続可能な社会論」という講義科目と里山保全の「身体知」を学ぶ「里山の環境学」というフィールド・ワーク、および「特殊講義A：フューチャー・リサーチSDGs」というアクティブ・ラーニングの科目を担当しています。改めてよろしくお願い申し上げます。